

公民館における子育て期の親の学びとその支援について② —子育て講座の参加者から子育てサークルの担い手へ—

宮 嶋 晴 子

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2023年6月26日受付、2023年8月8日受理)

要 旨

本稿は、2022年にまとめた「公民館における子育て期の親の学びとその支援について①—家から一步を踏み出し子育て主体として成長することを支える講座づくり—」の続編である。事例にみる公民館講座に参加した子育て期の親は、公民館職員の後押しにより、家から一步を踏み出し、地域の中で人や場に出会い、語り合う中で、気づきや人とのかかわりが生まれている様子が見られていた。本稿では、その子育て期の親が、引き続き子育て講座に参加し続けていきつつ、公民館職員の後押しを受けながら、子育てサークルを立ち上げていく過程、並びにその支援の在り方をとらえた。

1. 背景と問題意識—親たちが学びの客体から学びの主体に展開する支援とは

2022年拙著の「公民館における子育て期の親の学びとその支援について①—家から一步を踏み出し子育て主体として成長することを支える講座づくり—」では、主に乳幼児期の子育てを行う親たちが、公民館職員の後押しによって、家から一步を踏み出し、公民館の子育て講座に継続して参加していく中で、人と出会い、語り合いの中で、学びの主体として成長していく経過を見ることができた。そこに至る支援は、公民館に親子をいざなう広報「公民館だより」の工夫による参加の後押し、親の学びのニーズに合った内容、そして参加者の主体的学習を基本とした参加体験型の講座の実施、講座内外の随所にちりばめられた人とかかわるしくみであった。

そして、この公民館の子育て講座に参加した親たちは、その後、公民館の子育て講座に参加しつつ、さらに参加者相互のつながりを豊かにし、自主活動としての子育てサークルを立ち上げ、現在に至り、主体的な活動を継続・発展させている状況が見られる。山本(2009)¹は、子育て中の親の主体的な学びの蓄積がある貝塚公民館の取り組みについて「地域、住民が求める『実際生活に即する文化的教養』(社会教育法第三条)に向けての学習を援助すること、すなわち住民が時代のなかで直面する課題を学ぶことを援助し、人々のつながり(クラブ、サークル、ネットワーク)を生み出してきた。」と述べ、そこに「住民の切実な学習を支える公民館の意味」があり、学習の援助とつながり支援が重要であると述べている。

しかし、現在の子育て支援や家庭教育支援という子育て期の親を支える学びの実践が、その住民自らが課題に気づき、人とつながり、学んでいく実践、またそれを支える公民館実践が多いとは言えない。そこで、待たれるのは、子育て講座等に参加する親たちが家から一步を踏み出し、その学びに参加し続けることにより、親が直面している「子育て」や「子どもの育ち」という生活課題に対し、学習主体として成長・発達していく実践であり、そのための研究ではないだろうか。

2. 研究の目的

そこで本稿では、「公民館における子育て期の親の学びとその支援について」の第2報として「子育て講座の参加者から子育てサークルの担い手へ」の段階までの実践のプロセスをあきらかにする。具体的には、公民館における子育て講座の在り方や公民館職員のかかわりを踏まえ、この公民館の子育て講座に参加し続けた親たちが、どのような経過をたどり子育て期の親としての学びの主体になっていったのか、また、そこからどのような経過をたどり、地域で活動を創り出す学びの主体になっていったのかをあきらかにしていくことを試みる。

3. 研究の方法

本稿では、子育て講座の参加者から子育てサークルの担い手に展開した公民館における子育て期の親の学びとその支援をとらえていくため、福岡県内にある一つの条例公民館の事業について、内容、職員のかかわり、親の学びについて、資料や聞き取り調査をもとに事例の分析を試みる。具体的には、この公民館が2005年から取り組んだ「子育て講座」の記録²とともに、その講座を受講した親たちが自主グループを立ち上げていくプロセスについて記録された親Tさんの活動ノート³や聞き取り⁴、また、公民館職員として「子育て講座」を企画、実行してきた公民館職員Kさんの活動記録⁵や聞き取り⁶等の分析からあきらかにしていきたい。

なお、本稿で使用する資料については、書類を作成した関係者に研究で取り扱うとの説明を行い、承諾を得ている。しかし、念のため地域や個人が特定されないよう、市町村や公民館名、個人の氏名等はすべて匿名として個人情報とプライバシーの保護に努めている。

4. 結果と分析①－自主活動につながった子育て講座の在り方と支援者のかかわり－

(1) 「子育て講座」開講式から大切にしていた語り合いのワーク

「子育て講座」では、毎年年度初めの開講式に、「仲間づくりのためのワークショップ」に取り組むことを大切にしていた。公民館職員のKさんは、年間24回に渡って一緒に活動していく親子にとって「名前を覚え互いをどんな人かを知るための場」や「友達になるための“はじめのいっぽ”の場」を目指したいと考え、毎年欠かさず取り組んでいた。具体的には、2006（H18）年4月27日実施の「友達づくりワークショップ」があり、まずここでは対等な場、自由に語り合う場であり、相手の話を否定せず語り合う場であることを説明して、遊びを取り入れながら「子どもの好きな遊び・食べ物は何?」「うちの子のすごいところ」「私（親）の性格や得意なこと」などの語り合う場をつくっていった。

ここでは、公民館職員Kさんが語りやすい「好きなものやこと」について語らせることから始め、親に「わが子のすごいところ」問いかけ、親がわが子をポジティブに捉えなおす過程、また、そこから見えてきたよいところを語っていく過程をつくることにより、わが子をより肯定的に見ること、すなわち愛情や愛着が増す場面をつくり出し、また、親自身においても自分を見つめなおし、得意なことを考えていく機会を設けたことにより、自分をポジティブに捉えなおすことが可能となり、より自分のことが好きになったり自信を持つことが可能になったりするワークであったと言えるのではないだろうか。公民館職員Kさんが、この子育て講座では、「参加する親子一人一人を主人公にしたい」と常々口にして現れがこの語り合いのワークだったようにも思える。年度末に実施したアンケート⁷では、「1年間同じメンバーで活動するため、ここに来れば仲間がいるという安心感があった」という親の感想にもこの語り合いワークを大切にしたい子育て講座の意義を見ることが出来る。

また、2008（H20）年4月22日に実施したの第1回開講式では、「うちの子の好きな遊び紹介」をテーマにワークショップに取り組み、親たちが「親子ロデオ、外遊びが好き、お兄ちゃんのまねをして遊ぶ、一人で遊んでいることも、おままと、公園でサッカー、滑り台にこっている、散歩、公園」など語っている内容を公民館職員Kさんが講座報告書に記録として残していた。中には、「ビデオ大好きで、サイレント家族、これじゃいけない!？」など、安心して語れる場だからこそ、日常のわが家の様子を包み隠さず発言しつつ、親自身が自分の子育てに向き合い自問自答するやり取りもみられていた⁸。

このように参加者が安心して語り合えるワークに象徴されるこの子育て講座では、まず参加者が肯定され尊重される存在であるという大前提があることによって、親子は安心して互いのことを知り、知られる関係が生まれ、これから始まる継続的な子育て講座の仲間を積極的につくっていかうとするモチベーションが生まれてきたことがわかる。支援者としては、親が安心して語り合える場面をつくることによって、親子の本音を知れたり、子育ての現状を知ることが出来、親子一人一人のことをより深く理解して学びの内容を考えていくことが出来ていたのではないだろうか。

(2) 親子一人一人を主人公にする支援者のかかわり

前述したように公民館職員Kさんは、1年間を通して、参加する親子一人一人を常に見て、会話して、良いところを引き出し、それを褒めるというかかわりを大切にしていた。そのかかわりが体现されている取り組みが閉講式に渡される「修了証書」と「卒業アルバム」である。

特に「卒業アルバム」は、子ども一人一人の名前が書かれ、その子にとっての1年間の活動の様子やその時々表情、またその時の言葉や思いが写真や言葉で丁寧に綴られている。「図表1」を見て欲しい。まず4月の講座スタート時の親子の記念写真から始まり、5月のおやつ作りの様子、また8月の学生との遊びの会や9月のおやつ作り、また10月の落ち葉遊びや公園への遠足、12月のお餅つきや1月のおもちゃ遊びの講座など、その子どもの活動を時間的経過とともに様子をとらえた写真とそれに対するその子の言葉や支援者の思いが綴られた内容になっている。

図表1 公民館の子育て講座の閉講式で配布する「修了証書」と「卒業アルバム」



この子ども一人一人の「卒業アルバム」は、その親にとっては子育ての営みにおいて、自分がどのような思いで子どもと一緒にその学びに参加し、わが子と一緒に参加した活動がどのようなものであったかという、その時々自身の子育ての一瞬一瞬を記録したものになっていた。また、子どもにとっては自分が子どもの時、どのような場でどのような人に囲まれ、どのような活動を通して何を体験したのか、どう成長してきたのかの軌跡を辿る記録になっていた。

併せて、「修了証書」では、1年間の子育て講座に参加した親と子の両方の名前が記され、親と子ども一人一人が学びの主体者であったことを視覚的にも、意識的にも大切に位置付けていたことを伺うことが出来た。

このような子育て講座を通した親子への働き掛けを行ってきた公民館職員Kさんは、公民館を退職する際に子育て講座からのつながりの深い親子から寄せ書き⁹をもらっている。そこには、親からの感謝の言葉だけではなく、小学生になった子どもたちからも感謝の言葉が寄せられていた。具体的には、「(公民館事業の時に) コップの話をしてくれてありがとうございます。私は、やさしい人になりたいです。5年間ありがとうございます。」や「(公民館事業の時に) 最後までそうじをしていると『Aちゃんえらいね、最後までありがとう。』と言われたことがとても嬉しかったです。ぼくも今までありがとうございます。」などである。ここでは、公民館講座に乳幼児期に親に連れられて参加していた子どもたちが、そこでの公民館職員Kさんから話し掛けてもらったり認めてもらったりした経験が、その子にとっては年数を経ても思い出に残るエピソード、嬉しかったエピソードとして記憶に残り続けているということを知ることが出来た。

5. 結果と分析②—公民館子育て講座の参加者が自主活動を始めた経緯—

(1) 仲間とともに自主企画のクリスマス会に取り組む

このように公民館では、2005年10月より、毎月第2、第4火曜日の午前、年間20～24回の子育て講座を開催し、そこでは「語り合いのワーク」や「一人一人を主人公」にするかかわりの講座を積み重ねていた。その公民館に自主活動の子育てサークルが出来たのは、その子育て講座に参加して1年になった乳幼児を育てる親Tさんから子育て講座を担当する公民館職員Kさんへの相談がきっかけだった¹⁰。

2006年11月頃、当時、4才と1才4ヶ月の乳幼児を育てていた親Tさんは「(公民館講座では)クリスマス会とかないですか?」と公民館職員Kさんに尋ねていた。Kさんは、「ごめんね。子育て講座では季節の伝統行事として、もちつきを行うので、(毎年)クリスマス会は計画してないんよ。」とクリスマス会を公民館でやりたいと申し出てくれた親Tさんの思いを受けとめ、子育て講座には実施計画がないことを丁寧に伝えた。しかし、公民館職員Kさんはそれで話を終わらせるのではなく、「よければ子育て講座に参加している親子などに声を掛けて、自主企画でやってみない?場所は公民館を使えるように予約しておいてあげるから。」と親Tさんに、自分たちで企画して取り組んでみる提案を行っていった。

そこで親Tさんは、子育て講座に参加していた親たちに、「自分たちでクリスマス会をやってみない?」と話をしていた。すると話を聞いた親たちは、仲間の提案をすぐに受け入れ、「楽しそう!やろう、やろう!」とすぐにやってみようという反応が返ってきた。そこで親Tさんは、早速その企画を進めたいと考え、自宅で話し合いをしようとして親子を誘った。公民館の子育て講座で積み上げてきた関係性は、公民館という公的な空間での関係性から私的な空間である自宅を行き来する関係性にまで進展していた¹¹。

Tさんの自宅に集まった複数の親子は、乳幼児の子どもとともに来ることから、途中でお腹がすいても大丈夫のように、一品持ち寄り食べ物やおやつを持って集まった。話し合う内容は、クリスマス会の内容についてであったが、この時、Tさんは、「持ち寄った食べ物やおやつから、料理の得意な人、パンやお菓子作りが得意な人いろんな特技を持った人がここにはいるんだ!と思ったんですね。」とメンバーそれぞれの一品持ち寄りの内容から一人一人の得意なことに着目し、この場面からメンバーの特技やスキルを活かしたらいろいろ楽しいことが出来るのではないかと考え始めていったという。クリスマス会の内容については、Tさんは、「みんなでつくるのが楽しいし、好きなんですよ。」と言ひ、まず親子でやりたいことを出し合い、皆で話し合いを重ねて、内容を決めていき、メンバー全員でワクワクしながら事前準備や実行、後片付けまで自ら役割分担して取り組んでいった¹²。

終了後、参加した親子たちから「ものすごく楽しかった!」という感想が口々に寄せられた。公民館職員が企画し、実行する子育て講座を受講するのとは、また違う、楽しさ、満足感を得ていた様子だった¹³。そこには、仲間とともにやりたいことを考え、それに向かって準備から、実行、そして片付けに至るまでのすべてを、親自らプロセスを経て実行したからこそ得られる楽しさや喜びがあったのではないかと考える。

その際、公民館職員Kさんたちのかかわりは、親たちがクリスマス会をつくるすべての営みが学びや交流のプロセスであることとらえたことから、公民館職員は場所の確保や広報宣伝、そして館長がサンタになって盛り上げるなど、求められたり相談を受けたりした内容についての後方支援に留めていた。それは、親の主体的活動を遠くから見守るスタンスでのかかわりであり、すなわち主体的な活動にいざなうかかわりであると考えていたからであった¹⁴。

(2) 「親子のやりたい」を支え誕生した公民館自主子育てサークル

公民館職員のKさんは、常々「講座の中では仲間づくりが弱いので、いずれ自主サークルができればいいなあ」と考えていた。そんな中、親Tさんの問いかけから始まった12月のクリスマス会の自主企画に取り組むプロセスを見て、「このママたちなら自主サークルが出来ると確信した」という。そこで、年が明けた1月や2月の子育て講座に参加するTさんやクリスマス会に参加した親子に対し、年度末の3月、「次年度から自主サークルやってみない?公民館サークル登録をすれば部屋は無料で使えるし、私も支援するよ。」と自主活動としての活動提案の声掛けを試みていった。Tさんたち乳幼児の親たちからは、すぐに「はい!やってみます。」と返事が返ってきた¹⁵。自主企画で取り組んだクリスマス会において親同士のつながりが増し

ていったことや自分たちで企画立案し、汗をかき、実行していったことによって、子育て講座を受けることとは違う楽しさを味わった経験があったからこそ、「また楽しいことができる。この仲間とだったら（自主活動も）やれるんじゃないか。自分たちでやってみたい！」という気持ちが湧き、自主活動を踏み出す後押しになっていたのだと考えられる。このように、子育て講座の受講から1年半を経た親たちが、クリスマス会という自主企画の体験と公民館職員の後押しを経て、2007年4月に公民館の自主子育てサークルとして誕生する運びとなった。以下、子育て講座と子育てサークルの年表を記す。

図表2 公民館の子育て講座と子育てサークルの年表

乳幼児親子対象の活動内容	1997 (H9) 年度～	2005 (H17) 年度	2006 (H18) 年度	2007 (H19) 年度	2008 (H20) 年度	2009 (H21) 年度	2010 (H22) 年度	2011 (H23) 年度	2012 (H24) 年度	2013 (H25) 年度
【自主活動】 子育てサークル										
【公民館主催】 子育て講座										

6. 結果と分析③——自主子育てサークルの運営と活動について

(1) 子育て講座の内容や方法を土台に子育てサークルを形づくる

この子育てサークルは、前述した公民館の子育て講座に参加していたメンバーを中心にスタートした。そこで、活動を立ち上げた後も子育て講座に参加しつつ、子育てサークル活動を行うことが前提となった。そこから、活動日は子育て講座が毎週第2、第4火曜日に行われていたため、同じ火曜日の子育て講座のない第3週に設定することをメンバーの話し合いで決定した。親子が公民館に行く日を火曜日に設定し、曜日の連続性のリズムを大切にしながら子育てサークルの活動日を位置付けていった。

発足後、最初に取り組んだのは「自己紹介カード」¹⁶の作成であった。内容は、「名前、住まい、子どもの人数」などの基本情報とともに、「似ているもの(人)、宝物(人)、得意な家事、ストレス発散法」など親との距離を縮めるような紹介の項目を、また最後には「自身の子育て方針」や「今年頑張りたいこと」などを書き合い、お互いのことを知り合うことから始めていた。

次に、活動内容を考えていく際には、みんなの「やりたい！」気持ちから活動をつくっていくということになり、アンケート¹⁷を実施した。みなで考え作成した質問は20に渡っていた。

具体的には、①子どもについて（好きな食べ物、よく遊ぶおもちゃ、よく遊んでいる場所）など、②参加者（母親）について、（今までの子育ての中で楽しかった&嬉しかった思い、好きなこと、特技や趣味、好きな食べ物、子どもの習い事について、幼稚園と保育園について）など、③家族について（家族構成や家族の好きなところ）であった。その結果は、子育てサークルの代表になった親Tさんの活動ノートに丁寧に集計されていた¹⁸。例えば、「子育ての楽しかった、嬉しかった思い出」では、「生まれてきてくれたこと、ヨチヨチ歩いて抱きついてきた時、自分だけを頼ってくれると思った時、ぐるぐるが上手にできた時、兄弟ケンカしても仲良く遊ぶようになった時、妹がコケた時に一生懸命なぐさめていた時、自分で電子レンジで“チン”していた時、上の子が下の子のことを宝物と言った時、“ママ”と最初に言った時、歩いた時」と参加者一人一人のかけがえのない思い出が集まり、それを参加者全員で共有する機会にしたことにより、さらに自身の思い出の振り返りになり、感動を再確認する機会になっていたことがわかる。代表のTさんもノートに「絶

図表3 子育てサークル活動参加者の自己紹介カード

私の名前は T です。 よろしくお願いします。
よく ラクガ に見てらって言われます。
血液型は B 型で、私の性格を一言で言えば とってあげられない です。
出身は に住んでいます。
子供は 人で、 が私の宝物です。
家事で得意なのは そうじ で、私の は最高です。
私のストレス発散は です。
私の子育て方針は です。
私は今年1年で を頑張りたいと思っています。

図表4 子育てサークル発足時に行ったアンケート

アンケートのけが

Q1 今までの子育ての中で思い出した出来事を書きなさい

思い出

- 生まれてきてくれたこと
- ママと最初に出会った時
- 子供が歩いてきた時
- 自分だけが寝ていて子供が泣く時
- 子供が初めて歩いた時
- 子供が初めて言葉を話した時
- 子供が初めてお友達と遊んだ時
- 子供が初めてお友達と遊んだ時
- 子供が初めてお友達と遊んだ時
- 子供が初めてお友達と遊んだ時

Q2 子供が1番好きな食べ物

- 果物(イチゴ) 6人
- パン
- トマト
- ヨーグル
- チョコレート
- アイス

Q3 子供は何人答えた?

2人 答えた 6人

3人 答えた 4人

1人 答えた 1人

Q4 子供が1ばんハマって子どもラッキー

- アンパンマン 3人
- しんじゆう 3人
- ちびまるまろ 3人
- トーマス 2人
- おまじない 2人
- いないいないばあ

Q5 子供がよく遊ぶおもちゃ

- ボール
- 積み木
- レゴブロック
- 電車
- ミニカー
- おもちゃ箱
- おもちゃ箱
- おもちゃ箱
- おもちゃ箱
- おもちゃ箱

対に忘れたくないな」と吹き出しにコメントを書き込んでいた¹⁹。このように、参加者の親の感動の思い出や、今(当時)感じている子育てへの思いやおかれている子育て状況を、書き合い、語り合うことを通してより深く自分自身の子育てを振り返る機会となっていたこと、また、それによって参加する親同士のつながりがさらに強まり、自分たちで活動していくモチベーションを高めていった様子が伺えた。

これらの取り組みは、公民館の子育て講座で、つねに人が出会う場面を大切にし、講座の最初に自己紹介を兼ねた「語り合いワーク」をすることを大切に位置付けていたことが土

台になっていたと考えられる。具体的には、子育て講座の中でお互いのことをよく知り合うために、自分の好きなことや嬉しかったことを紹介し合ったり、また愚痴や悩みなど本音を出しあったりする「語り合いのワーク」など、参加者同士の距離を近づけていく働きかけが、この子育てサークルの立ち上げ時に参加者全員で大切に行われてきたところに現れている。

また、活動内容を考えていく際にも、年度末の子育て講座の受講後アンケートから次年度学びたいテーマを把握し、その親の声から講座を企画立案していたこと、また、公民館講座以外の時間でも、公民館職員と親たちの日常的な会話のやりとりから親たちの「やりたい!」を引き出し、活動を組み立てていた公民館職員のかかわりを、この子育てサークルでも参考にしながら運営や活動内容を形づくっていったとみることが出来る。

(2) 「ともにつくる」プロセスを大切にしたい子育てサークルの活動内容

こうして誕生した子育てサークルは、メンバー全員が子育て講座の受講を継続しながら子育てサークル活動に参加していくことから、「図表5」のような日程と内容の子育てサークル活動が行われていった。ここでは、親たちの発足に至る語り合いの中で、「子育て中のママ同士だからこそ分かり合える気持ちを話し合える場にしたい。互いに子どもたちの成長を見守っていける場にしたい。」²⁰ことを目指すことが確認されており、そこを目指して以下のような活動の特徴が見られていた。

例えば、「図表4」の2008年の1年間の子育てサークル活動の内容から、7月にキャンプ準備、11月のクリスマス会準備など、メインの活動の時期の前月は「準備」活動を位置付けているという特徴である。多くの活動では活動メニューが中心に事業計画が立てられることから、前準備自体を親子サークルの活動に位置付けるという事例はほとんど見受けられない。近年では自主活動においても子育て支援が浸透しており、参加する親子に負担が掛からないように支援者等が活動行事に必要な材料を集めたり、前準備や段取りを行ったなど、親子にはメインの活動のみを楽しんでもらう支援が行われているケースも見受けられる。しかし、この子育てサークルでは、自分たちが決めたメインの活動の1ヶ月前に、参加者全員で「どのような内容にするのか」や「当日に向けてどのような準備が必要なのか」を語り合い、それから必要な準備を全員、または役割分担をして各々で取り組むことを大切にしていって活動を位置付けていた。すなわち、前準備から後片付けまで、自分たちで考え、計画し、汗をかいて実行するという「ともにつくる」活動のプロセスを特に大切にしていって取り組まれていたことがわかる。

図表5 公民館における子育て講座と子育てサークルの活動についての一例（2008年）

時期	主催名	活動テーマ・活動内容など	講師など
4月2週	子育て講座①	開講式・仲間作り	全員、ファシリ公民館職員
3週	子育てサークル(1)	ポスター作成	全員
4週	子育て講座②	遊び(外)・春のプレーパーク	プレーパークの会
5月2週	子育て講座③	タッチケア	タッチケア講師
3週	子育てサークル(2)	持ち寄りバザー	全員
4週	子育て講座④	食・かんたんおやつ作り(デザート春巻き)	パン講師
6月2週	子育て講座⑤	音楽・レインボーコンサート	県共催事業
3週	子育てサークル(3)	みんなで遊ぼう	全員
4週	子育て講座⑥	遊び(外)・遠足(花公園)	
7月2週	子育て講座⑦	絵本・おはなし会	読みきかせサークル
3週	子育てサークル(4)	キャンプ準備	
4週	子育て講座⑧	遊び(内)・おにいちゃんおねえちゃんと遊ぼう	子育て支援グループ
8月2週	子育て講座⑨	遊び(外)・夏のプレーパーク	
3週	子育てサークル(5)	水遊び	
4週	子育て講座⑩	音楽・リトミック	音楽講師
9月2週	子育て講座⑪	手作り・手型・足型アート	社会教育施設指導員
3週	子育てサークル(6)	公園に行こう	
4週	子育て講座⑫	講座・子どもとのコミュニケーション【託児付】	プログラムスペシャリスト
10月2週	子育て講座⑬	交流・中学生との交流	地域の中学生
3週	子育てサークル(7)	パン作り	
4週	子育て講座⑭	遊び(外)・秋のプレーパーク	
11月2週	子育て講座⑮	ヨガ・ヨガでリフレッシュ	ヨガ講師
3週	子育てサークル(8)	クリスマス会準備	
4週	子育て講座⑯	講座・食べる・育つ【託児】	保育園園長
12月2週	子育て講座⑰	伝統行事・もちつき	公民館講座高齢者と一緒に
3週	子育てサークル(9)	クリスマス会	
4週	子育て講座⑱	遊び(内)・おもちゃのひろば	おもちゃコンサルタント
1月2週	子育て講座⑲	国際交流・英語であそぼう	フィリピン人母親
3週	子育てサークル(10)	もちつき	
4週	子育て講座⑳	食・食育のおはなしと調理実習【託児】	管理栄養士
2月2週	子育て講座㉑	交流・中学生との交流	地域の中学生
3週	子育てサークル(11)	豆まき	
4週	子育て講座㉒	遊び(外)・冬のプレーパーク	
3月2週	子育て講座㉓	閉講式・修了証書授与、アンケート記入、茶話会	
3週	子育てサークル(12)	1年間の反省の話し合い	

その「ともにつくる」プロセスを大切に活動によって、仲間との関係性に一体感、達成感が増し、親たち自身が準備のプロセスから実行まで、楽しく役割を担い合い、励まし合いながら取り組んでいった様子を伺うことが出来た。すなわち、準備からのプロセスに大切にされてきた語り合い、「ともにつくる」活動は、参加者同士は心の距離を縮め、自然と互いのことを深く知り合うようになり、より深いつながりから、「気持ちりが分かり合える」関係が達成されていたと思われる。

次に、二つ目の方向性「子どもの成長を見守っていける場」については、「図表5」の年間の活動内容の中に見られるように、6月「みんなで遊ぼう」、8月「水遊び」、9月「公園(遊び)」、10月「パン作り」、12月「クリスマス会」、1月「もちつき」、2月「豆まき」など、年間半数以上の内容が、子どもの遊びや体験活動を中心とした活動であり、子どもの成長を中心に据えていることがわかる。さらに、「見守っていける場」にしたいという言葉にも現れているように、この活動では、あくまでも大人による子どもの遊ばせ場や体験させ場、すなわち子どもを学びの客体にしてしまう活動や場ではなく、子どもの主体的な育ち、すなわち子どもが遊びを通して主体的に学び成長する場を目指し、それを見守っていける場にしたいという思いが込められているのである。具体的には、親たちはまず子どもと一緒に自らが楽しむこと、そして、そこから感じる子どもの成長を実感し、心を通わせ合った仲間と子どもの育ちを一緒に見守っていける場にしたいという場である。

このように、ここに見る発足時の子育てサークル活動では、子育て講座で大切にしてきたことが土台になっ

て、子育てサークルの運営や活動の最初が形づくられていたことを伺うことが出来た。これらのことから公民館で生まれる自主活動が、その前段となる子育て講座がモデルとなり自主活動への助走や伴走といった学びの場や機会にもなり得ることがわかった。

7. 考察

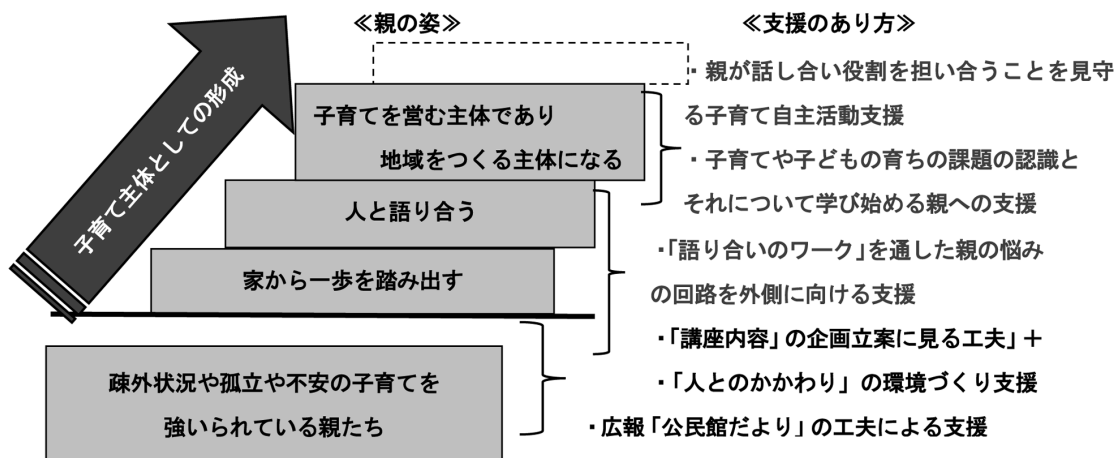
最後に、本稿のテーマである「公民館における子育て期の親の学びとその支援について」、「子育て講座の参加者から子育てサークルの担い手になるまで」の考察を行う。

まず公民館の子育て講座の在り方と支援者のかかわりについては、開講式を始め講座の随所に安心して語り合える場を講座の中にちりばめていくこと、また閉講式に見られた一人一人に手渡しされた修了証書や卒業アルバムの実践等によって、家から一步を踏み出した親たちが、地域の公民館講座に参加し、様々な他者と出会い、語り合いにより深まった他者との関係をもとに、自身の子育て課題に気づいたり、自分が大切にされている存在であったりすることを実感していくプロセスを経ていた。

次に、公民館の子育て講座の参加者にモチベーションが高まり、実際に自主活動を始める経緯に至ったことについては、仲間とともに自主企画のクリスマス会にチャレンジしたこと、また、「親子のやりたい」を支えるコーディネーターやファシリテーターの専門性を備えた公民館職員の存在によって、自主活動としての子育てサークル立ち上げに至っていたことが伺えた。そこには、公民館講座での学びが自主子育てサークルの活動の土台になりつつ、その講座から学んだ「ともにつくる」プロセスの楽しさや達成感によって、親たちは主体的活動に向けた子育てサークルの担い手になっていく学びのプロセスを歩んでいったと考えられる。

すなわち、以上の考察から、本稿の前段となる「公民館における子育て期の親の学びとその支援について①—一家から一步を踏み出し子育て主体として成長することを支える講座づくり—」の内容と本稿の「公民館における子育て期の親の学びとその支援について②—子育て講座の参加者から子育てサークルの担い手へ—」の内容を重ねて考えていくと、家から一步を踏み出し、地域における学びの「はじめの一步」を踏み出した親たちは、公民館の子育て講座の中で繰り返し語り合いの機会を持ち、子育てを営む主体としての自覚や意識が生まれ、子どもの育ちを阻害している課題に気づいたり、必要な学びに取り組み始めたりする。同時に、子育てサークルの運営や内容を考えたり役割を担っていったりすることを通して、親が地域をつくる主体であることを意識し始め、よりよい地域づくりに向けた実践の主体に変容して姿を見ることが出来た。まさに公民館における子育て期に必要な学びとその支援、山本（2009）が言う、「地域、住民が求める『実際生活に即する文化的教養』としての学びが展開されている公民館実践になっているといえよう。

図表6 公民館における子育て期の親の学びとその支援についての概念図



-
- ¹ 山本健慈「貝塚子育てネットワーク二〇年の歴史的意義」、貝塚ネットワークの会編著・山縣文治監修『うちの子よその子みんなの子-本年の付き合い、だから20年続いている―』第3章 ここがいいのだ 貝塚子育てネット」、P.162—175年、2009年。
 - ² XX公民館「子育て講座の年間プログラム」2005～2012年
 - ³ 親Tさんが記録した子育てサークルの活動ノート、2007～2012年
 - ⁴ 親Tさんへのインタビュー、2023年3月11日
 - ⁵ 公民館職員Kさんの活動記録メモ、2005～2012年
 - ⁶ 公民館職員Kさんへのインタビュー、2023年3月11日
 - ⁷ XX公民館「実績報告書」2006年
 - ⁸ 前掲5参照
 - ⁹ 公民館職員Kさんが退職時に子育て講座からのつながりのある親子にもらった寄せ書き。2013年。
 - ¹⁰ 前掲6参照
 - ¹¹ 前掲4参照
 - ¹² 前掲4参照
 - ¹³ 前掲3参照
 - ¹⁴ 前掲6参照
 - ¹⁵ 前掲6参照
 - ¹⁶ 前掲3参照
 - ¹⁷ 前掲3参照
 - ¹⁸ 前掲3参照
 - ¹⁹ 前掲3参照
 - ²⁰ 前掲4参照

Community Centers' Educational Value for Parents with Children and Types of Support (2) -How Learners in Parenting Classes Become Organizers of Parenting Circles-

Haruko MIYAJIMA

Department of Childhood Care and Education Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

This paper is a sequel to “Community Centers' Educational Value for Parents with Children and Types of Support (1) -Designing classes that encourage parents to become empowered child-rearing agents-” written in 2022. The parents of young children who participated in the community center classes observed in the case studies stepped out of their homes, met new people and discovered new places in the community. They were seen having interactions with others through dialogue and gaining insights, with the encouragement of the community center staff. This paper captures the process of these parents continuing to attend parenting classes while also launching a parenting circle with the support of the community center staff, as well as the types of support they received.